

シンデレラ・コンプレックスについての研究

藤岡 秀樹*

(1988年6月30日受理)

問 題

女性の自立を内から妨げているものを Dowling (1981) は、シンデレラ・コンプレックス** (Cinderella Complex) と名付けた。童話の『シンデレラ物語』の主人公のシンデレラのように、苦勞をしてもいつかは素敵な王子様が登場するであろうと願望し、自分の人生を王子様にまかせ、守られたいという心理的狀態のことである。

女性の自立を妨げているものは、外にあるのではなく、彼女自身の内面にあるという点が Dowling の主張の重要な点である。また、シンデレラ・コンプレックスは独身の女性だけでなく、既婚女性にも、離婚者にも、未亡人にも——自立を求めようとする全ての女性に存在すると Dowling は考えている。シンデレラ・コンプレックスは単なる玉の輿の結婚願望ではなく、依存願望、結婚幻想、成功回避、自信のなさ、依存と独立・自立との葛藤、責任回避などの特徴が複雑に混じりあったものである。

日本では落合 (1984) が、Dowling の叙述に基づき、シンデレラ・コンプレックス尺度を作成し、尺度の因子構造の検討や年齢・職業による差異、欲求や動機尺度との関係を調べている。因子分析の結果、①「自信のなさ・根なし草」因子、②「依存・女らしい存在でありたい」因子、③「責任回避」因子——の3つを抽出している。そして、「自信のなさ・根なし草」因子の因子得点は、30歳台後半まで年齢の上昇に伴い低下し、30歳台後半が最も自信のある、安定した時期で、その後、因子得点が高くなり、自信のなさ・根なし草感が強まることを見出している。欲求などの尺度との関係についての分析では、①3因子とも成功回避欲求と正相関の関係が、②「依存・女らしい存在でありたい」因子は達成欲求と正相関の、「自信のなさ・根なし草」因子は自立欲求と負相関の関係が、③「依存・女らしい存在でありたい」因子と「責任回避」因子は、女性役割尺度と正相関の関係がみられることがわかった。

青年期後期は自立の欲求が強まる時期であるが、女子青年においては、独立性と依存性は対立する両極概念ではないという知見 (高橋, 1968; 加藤・高木, 1980) が得られている。この時期の女子青年を対象としてシンデレラ・コンプレックスの内容を検討することは、独立性と依存性の関係を解明する有効な手がかりを与えてくれることになるだろう。

本研究では、落合 (1984) の作成したシンデレラ・コンプレックス尺度を用いて、20歳前後の未婚女性にみられるシンデレラ・コンプレックスと諸欲求および性役割期待との関係を明らかにすることを目的とする。落合の作成した尺度の項目の中には、Dowling の解釈とは少しニ

* 岩手大学教育学部

** Dowling の著書 "The Cinderella Complex. Women's hidden fear of independence." の章の構成は次のようになっている。第1章『依存願望』第2章『退却の人生』第3章『「女らしさ」の表裏』第4章『彼女たちを委えさせるもの』第5章『結婚幻想』第6章『ジェンダー・パニック』第7章『自立への飛翔』訳は柳瀬尚紀(訳)『全訳版シンデレラ・コンプレックス』による。

エ・アンスが異なるものが含まれるので、一部修正して使用する。そのために3因子に分類せず当初、落合が抽出したシンデレラ・コンプレックスの3つの特徴——①依存心、②自信のなさ・根なし草感、③独立と依存との葛藤——に該当する項目を下位尺度として取り扱い、合計点をシンデレラ・コンプレックスの指標として処理を行う。

性役割期待についても、男性役割と女性役割の認知の仕方に差があるか——伝統的性役割観をもっている傾向が強いのかどうか——をみることのできる測度を用いることにする。そして、自由記述法による「結婚」と「女性の労働」についての意識調査も行うことにする。

仮説として以下の3つをあげることができよう。

〔仮説1〕 シンデレラ・コンプレックス傾向の強い者は弱い者と比べて、『追従』欲求・『求護』欲求が強く、『達成』欲求・『自律』欲求が弱いであろう。

〔仮説2〕 シンデレラ・コンプレックス傾向の強い者は弱い者と比べて、性役割期待の認知において、男性と女性の役割認知のとらえ方に差異を大きくつけているであろう。換言すれば、伝統的性役割観を強くもっているであろう。

〔仮説3〕 「結婚」や「労働」についての意識調査においても、シンデレラ・コンプレックス傾向の強い者は弱い者よりも、性別役割分業意識を反映した回答を示すであろう。

方 法

1. 被験者

岩手県内在住の17歳から24歳までの未婚女性136名に後述する質問紙を配布し、後日、回収を行ったところ、98名の回答を得ることができた（回収率72.1%）。本研究ではこの未婚女性98名を被験者とする。被験者の平均年齢は20.17歳であり、その内訳は、大学・短大生が48名、専門学校生が42名、高校生が1名、会社員が5名、無職が2名であった。

2. 質問紙

(1) シンデレラ・コンプレックス尺度

Dowling (1981) の叙述に基づいて落合 (1984) が作成した18項目からなるシンデレラ・コンプレックス尺度の中から、16項目を採用した。その内、2項目は文章表現を一部修正して用いた。下位項目の内訳は、「依存」項目が5、「自信のなさ・根なし草感」項目が6、「独立と依存との葛藤」項目が5である（付表1参照）。

評定は「非常にそう思う」「かなりそう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「かなりそう思わない」「まったくそう思わない」の6段階で行わせた。

(2) 欲求尺度

EPSS 性格検査 (Edwards, 1954) の日本語版 [大学・一般用] (肥田野ら (訳・編), 1970) の質問文の中で、シンデレラ・コンプレックスの特徴と関連が深いと思われる欲求の特性を表わすものを取りあげた。その内訳は、『達成』欲求が9項目、『追従』欲求が3項目、『自律』欲求が6項目、『求護』欲求が3項目、『支配』欲求が3項目、『内罰』欲求が2項目、『持久』欲求が1項目である（付表2参照）。

各質問文を提示し、「非常にそう思う」「かなりそう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「かなりそう思わない」「まったくそう思わない」の6段階で評定を行わせた。なお、シンデレラ・コンプレックス尺度と欲求尺度の両者の項目を合わせてランダムに配列し、〔調

査1]とした。

(3) 性役割期待尺度〔調査2〕

性役割期待尺度は、柏木(1972)によって作成されたものを用いた。これは、21項目の特性が、男性あるいは女性にとってどの程度望ましいのか、男女別に評定を行わせるものである。本研究では「最も望ましい」「非常に望ましい」「やや望ましい」「やや望ましくない」「非常に望ましくない」「最も望ましくない」の6段階*で評定を行わせた。

21項目の内訳は、男性役割次元として、①第Ⅰ因子(『知性』)項目が11、②第Ⅲ因子(『行動力』)項目が8、女性役割次元として、③第Ⅱ因子(『美と従順』)項目が8となっている(付表3参照)。各項目の差異得点〔=男性評定値-女性評定値〕の合計を因子得点として算出する。

(4) 結婚および労働についての意識調査〔調査3〕

「女性にとって結婚とは」「女性が働くことについて」という質問を提示し、自由記述を求めた。

3. 手続き

調査1~3からなる冊子を配布し、後日、回収を行うという留置法の形態をとった。調査は1987年10月から12月にかけて実施された。

結 果 と 考 察

1. シンデレラ・コンプレックス尺度の分析

シンデレラ・コンプレックス尺度の全項目に回答を行った93名の合計点の平均を求めたところ、平均は62.64、SDは7.90であった。そこで、平均値より1SD以上得点が高い者(71点以上)をシンデレラ・コンプレックス(以下CCと略す)得点上位群、1SD以上得点が高い者(54点以下)をCC得点下位群、残りをCC得点中位群として抽出した。3群の下位尺度別の得点を表1に示す。

3群間に得点の平均値に有意差がみられるかどうかF検定を行ったところ、3群の下位尺度と合計点の全てにおいて、1%水準で有意な群間差がみられた。多重比較の結果、CC得点上位

表1 各群のシンデレラ・コンプレックス得点の平均と標準偏差

| | CC得点上位群 (N=14) | CC得点中位群 (N=65) | CC得点下位群 (N=14) |
|---------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| 『依 存』 項 目 | 24.64 (2.82) | 19.97 (2.88) | 15.71 (3.26) |
| 『自信のなさ・根な し草感』項目 | 26.07 (2.58) | 22.74 (3.02) | 17.21 (3.69) |
| 『独立と依存との 葛藤』項目 | 23.29 (3.67) | 19.57 (2.14) | 16.71 (2.89) |
| 合 計 | 74.00 (2.75) | 62.42 (4.11) | 49.64 (5.56) |

()内はSD

* 柏木(1967, 1972)の研究では「どちらともいえない」というニュートラルな評定段階を加えて7段階となっている。本研究ではニュートラルな評定に集中することを防ぐために、6段階評定を採用した。

群>CC得点中位群>CC得点下位群(いずれも各群間で1%水準で有意)の関係を見出した。

次に、3つの下位尺度間の内部相関を求めたところ(表2参照)、 $r = .30$ 前後の低い有意な正相関が得られた。このことは、3下位尺度の間に弱い結びつきがあることを意味するものである。

表2 シンデレラ・コンプレックス尺度の内部相関(N=93)

| | 依 存 | 自信のなさ・根なし草感 | 独立と依存との葛藤 |
|-------------|--------|-------------|-----------|
| 依 存 | | .291** | .292** |
| 自信のなさ・根なし草感 | .291** | | .341** |
| 独立と依存との葛藤 | .292** | .341** | |

** ; $p < .01$

2. 欲求尺度とシンデレラ・コンプレックス尺度との関係について

CC得点の上位群・中位群・下位群別に7つの欲求尺度の得点の平均と標準偏差を算出した。その結果を表3に示す。

表3 各群の欲求尺度得点の平均と標準偏差

| | CC得点上位群 (N=14) | CC得点中位群 (N=61) | CC得点下位群 (N=14) | F検定 $df=2/86$ | 多重比較 |
|----|-------------------|-------------------|-------------------|------------------|-------------------------------------|
| 達成 | 38.29 (6.46) | 39.28 (5.05) | 38.07 (6.12) | $F=0.38$ N S | |
| 追従 | 11.50 (1.24) | 11.34 (1.50) | 10.00 (1.85) | $F=4.67$ * | 上位群>下位群** 中位群>下位群** |
| 自律 | 25.00 (2.93) | 23.92 (3.12) | 22.86 (3.66) | $F=1.53$ N S | |
| 求護 | 15.21 (2.04) | 12.51 (2.16) | 12.14 (1.85) | $F=10.13$ * * | 上位群>下位群** 上位群>中位群** |
| 支配 | 8.79 (3.78) | 9.43 (2.18) | 8.07 (2.58) | $F=1.68$ N S | |
| 内罰 | 8.64 (1.67) | 7.30 (1.67) | 5.36 (2.02) | $F=12.44$ * * | 上位群>下位群** 上位群>中位群** 中位群>下位群** |
| 持久 | 4.43 (0.73) | 4.54 (0.88) | 4.43 (0.73) | $F=0.16$ N S | |

()内はSD * ; $p < .05$ ** ; $p < .01$

3群間に得点の平均値に有意差がみられるかどうかF検定を行ったところ、有意差がみられた欲求尺度は『追従』($p < .05$)、『求護』($p < .01$)、『内罰』($p < .01$)の3項目であった。次に、多重比較を行ったところ、『追従』ではCC得点上位群=CC得点中位群>CC得点下位群、『求護』ではCC得点上位群>CC得点中位群=CC得点下位群、『内罰』ではCC得点上位群>CC得点中位群>CC得点下位群——の関係が見出された。

いずれもCC得点上位群は、CC得点下位群や中位群と比べて得点が高く、それらの欲求が強いということである。シンデレラ・コンプレックスの傾向が強い者程、人に責任を任せるような責任回避の傾向や、困っている時には、他人に同情されたり援助を受けたりすることを好

